

NEZASU

教育研究所ニュースレター No.20 1997年1月

発行：(財)神奈川県高等学校教育会館・教育研究所 〒220 横浜市西区藤棚町2-197 電話：045(231)2546



教育相談から見た高校生

浅見 聡

はじめに

私たち神奈川県教育文化研究所では、1981年より「親と教師の教育相談室」を開設しています。当初は手紙による相談のみを受け、それに対して複数名の相談委員が検討を加えた上で返信する、そういった活動でした。しかし手紙だけではやはり相談件数もさして多くなく、「県民への広い還元」という活動視点から、すぐに電話による相談を受け付けることを開始、加えて、場合によっては直接相談者と面談することも始めました。現在では週5日の電話相談対応を中心に、直接相談に対応する相談員6名（委員兼務）の他、月1回のケースカンファレンスを主な活動とする8名の相談委員が活動にあたっています。

私がこの相談活動に参加させていただいているのは最近の4年間にすぎませんが、この短い間にも、教育に関して世間を騒然とさせる様々な出来事が起こりました。「いじめ」を苦にした自殺の続発。不登校の子供たちの急激な増加と、それに伴う新たな学校論議、そして文部省の新たな積極姿勢、など数え上げたらきりがありません。そして相談の内容もこの短期間に多様化が進み、その

件数も増加してきています。

最近の相談傾向

上述したように、相談の量が増え、内容的には多様化を見せる中で、あえて最近の相談の傾向・特徴といったものをあげてみたいと思います。まず相談の内容についてですが、私たち相談室へ持ち込まれる相談のうち、一番多いものは不登校に関する相談です。不登校については相談室開設以来ずっと増加の傾向が止まりません。さらに最近では相談対象の年齢幅が広がり、また、不登校状態に到るプロセスあるいはきっかけとなった事由などが極めて多様化・複雑化・重層化してきており、その対応が大変難しくなっています。

性格や生活についての相談も多いのですが、特に「友人（人間）関係の結びつき方がうまくできない」、「年齢のわりには子どもっぽく、感情抑制がきかず、協調性がない」、「無気力、無目的に日々を過ごしている」などがこのところ目に付きます。

相談対象の年齢についてはすでに述べましたが、不登校だけにとどまらず、様々な内容で、上は社会人（教員含む）から下は幼稚園（保育園）児ま

での幅広い年齢層での相談が寄せられるようになりました。人間関係での悩みなどは、会社や学校（学校内でもクラス・部活動・職員室など場面は様々）さらには幼稚園・保育園そして地域（近所つきあい）のそれぞれで抱えており、残念ながら相談件数としても増加の一途をたどっております。少子化、親の転勤の常態化、個人主義化、教員の多忙化等が増加に拍車をかけているのでしょうか。

このような中で、このところ高校生に関する相談の割合が増えてきているのです。

高校生についての相談

私たちの相談室では、神奈川県下のすべての公立の小・中学校ならびに市立の高校に対してチラシやポスターを配布しており、相談を寄せられる方々も「学校で先生にチラシを渡されて」とか「先生の紹介で」当方を知ったというのが大半です。したがって相談対象となるのも県下の小・中学生が主であり、その親や担任教師からの相談がいきおい多いわけです。

ところがそうした情報環境であるにも関わらず、このところ目立って高校生を対象とした相談が多いのです。私たちは月ごとに相談件数と相談対象者の別、その内容などの集計を行っていますが、高校生についての相談件数が月によっては全体の40%近く(!)を占めることもあるのです。

毎月1回開かれる全相談委員が集まってのカンファレンスでも度々とり上げられるようになりました。つまり小学校と中学校では子どもたちを取り巻く環境がちがうので、相談員も当然その差異に配慮しつつ小・中学生対象の相談にに応じてきているわけですが、それに加えて高校生対象の相談対応となると、＜中退＞や＜原級留置＞などの義務教育制度下では考えられないファクターを考えねばならなくなります。小・中学生を対象としたケースを主に検討してきた委員会もそうした状況下で、より多角的視点が要求されているのです。それでは高校生対象の相談として、一体どのようなケースが寄せられてきているのでしょうか。事例をあげてみます。

まず相談件数の一番多い不登校に関するもので

す。

「Aさんは県立高校の1年生。今年度2年生に進級するはずだったのだが、出席日数が足らず、定期試験も受けなかったので結局留年ということになった。中学生の時から不登校気味だった。高校入学後2ヶ月ほどは登校したがそれ以降ずっと不登校である。本人はそれでも大学進学の意味はあるという。」

「Bさんは県立高校の2年生。不登校で留年。今はアルバイトに精をだしている。学校をやめる気はないのだが、さりとて登校する意欲を見せていない。学校からは自主退学の勧告をうけている。」

「Cさんは中・高一貫の私立高校1年生。学内の人間関係がうまくゆかず、中学時代から学校を休みがちだった。何とか高校には進学したが、このところ言語に障害がみられるなど身体的症状が出るほど、登校に対して強迫的観念が増している。本人は受験し直して別の学校へ行きたいと言っている。」

進路や進学についての相談も比較的多いようです。

「Dさんは私立の進学校の3年生。2年生の中頃から成績が下落し始め、＜進学コース＞からはずれてしまった。勉強意欲も急速になくなり、本人は大学進学はせず音楽関係の専門学校へ行きたいと言い出す。親としては一時的なく逃げ＞の姿勢ではないかと思えてならない。」

「Eさんは私立高校の2年生。いわゆる帰国子女である。学校での集団的学習にどうしてもなじめず、＜大検＞など別の進学方法を探している。」

＜いじめ＞など、学校での人間関係に関する相談もいくつかみられました。

「Fさんは私立高校の3年生。中学生のころから友達付き合いがうまくない。いわゆる＜シカト（無視）＞にあたりたりして、ますます人との関係に自信が持てなくなってしまった。大学進学の大事な時期でもあるのに、学校での人間関係に疲れ切り、家庭ではその反動からか、家族に対してヒステリックに当たり散らすような日々が続いている。」

「Gさんは県立高校の2年生。1年生の時から

＜いじめ＞に悩んでいる。上履きが盗まれる。多人数での言葉による暴力。細かないやがらせ。教室で、トイレで、場所を問わず繰り返される＜いじめ＞。学校は休みたくないの、今は保健室登校をしている。」

このほかにも、「男女交際について」や「家庭内暴力」、「犯罪から生徒を守る対策について」などの相談が寄せられています。

高校生についての相談、に思うこと

さて上にあげた事例も含め、最近の高校生についての相談で思いついたことをおおざっぱに以下書き留めておきたいと思います。様々な問題でその相談対象となる年齢の幅が広がってきたことは、何度も述べましたが、このことは高校生の抱えている問題が小・中学生からの延長としてあることをも意味しています。

＜延長＞という語は不適切かもしれません。＜延長＞という語がここでは発達・発展という運動を伴っていませんから。つまり小・中学生で抱えた問題が、高校生になって、「発展的に変質をしながらお抱え込んでいる」ということではないのです。あえて言えば、「小・中学生での問題の普遍化」とでも言いましょうか。小・中学生が大人化したのか、高校生が子ども化したのかわかりませんが、質的な差異が少なくなっているように思われます。おそらく＜不登校＞の問題をはじめとして、先述したように、問題群の背景にあるそれらの因子が複雑に、重層的に、多様な形で存在しており、しかもそれらの＜現れ＞が、学校という場で特定の形式を持って常態化しているのでありましょう。

「一学年違うとその相手の子の考えが理解できない」と言っているのは、高校生だけではないのです。小・中学生もそうです。いや大学生も、社会人もそうかもしれません。実は「違う学年の子を理解できない」のは「同じ学年のあまり口を利いたことのない子を理解できない」のと同質なのです。＜学年＞という和学校独特の言い方ですが、本質はひろく日常的なことなのです。

いまや中学生の大部分が高校へ進学する時代で

す。上述の相談事例にもあるように、「とりあえず高校へ進み」「とりあえず卒業を考え」「できれば大学へ進学したい」と思っている子どもたち（親たちも）が大半です。輪切りだなんだと悪評もされた神奈川方式も、こうした時代のニーズ（？）に応えてきたのではないのでしょうか。

しかしこうした状況下、今度は中学生を受け入れてきた高校が変化を求められているのではないのでしょうか。入試制度改革のことだけではありません。子どもたちへの対応全般についてです。

高校生に関わる相談の内容が小・中学生のそれと、本質的に大きな隔たりがなくなってきたという事実は、「全体的な」傾向です。相談対象となっている高校生たちは決して「特定の」子どもたちではない、と私たちはみえています。いわゆる＜課題集中校＞だけに「課題が集中している」のではないのです。学校間格差の是正は最も重要な課題です。＜高校全入＞の負の痛みを特定の学校に背負わせることは基本的にまちがっています。入試制度改革も必要です。しかし現実として、いわゆる＜公立・私立進学校＞から＜課題集中校＞に到るまで、「すでに」子供たちは皆学校の、学制の、あるいは社会の負の痛みを問題として抱え込んでいるということは忘れてはなりません。いわゆる＜学力の高い子＞も、そうでない子も、一皮むけばそこには同じ苦悩する魂があるのです。それもかなり基本的なレベルで。

自己責任の自覚はもちろん大切です。「もう大人なんだから」という言い方も、とっても使いたい。でも果たして高校は、子供たちに対して従前通りの対応でいいのでしょうか。特に＜上位校＞の現場の方々、いかがですか。

私はあるまじめな高校生の言った次のような言葉が忘れられません。その子はこう言いました、「俺は学校ではハンドルのない車なんだ。曲がろうと思って曲がれない。それでいてスピードだけはどんどん増していくんだ。いつか大事故を起こしそうだよ」。この言葉どう受け止めますか。（あさみ さとし

神奈川県教育文化研究所「親と教師の教育相談室」相談員、神奈川県立看護専門学校講師）

◆ 教室の外生徒たち ◆

保健室に集う生徒の居場所づくり

近藤 章子

保健室に出入りする生徒達は、普通の真面目なタイプだ。彼らを見ていると対人関係をうまく築けず、一度つき合い始めた友人と離れられない。けれどもつき合いは学校に限定されとても浅く、「別に親友じゃない。一緒にいるだけ」などと言う。小さなトラブルでも仲直りが出来ない。そのためか、喧嘩になるようなことは言わない。また、彼氏や彼女がいないと＜ダメな自分＞の様に感じてしまう。同性の友人関係さえきちんと持てないのに、異性につき合うため、性体験が早い。そして相手がすぐに変わる。・・・これらに伴う悩みの相談に保健室に来る。保健室に人が多いと入室できない生徒が出てくるので、たまり場にしないように運営をしてきた。しかし、それでは「ただ何となく」来る生徒の“居場所”がなくなってしまう。

中沢高校では一学期から、保健室の隣を第二保健室的な役割の部屋として、健康診断業務のために利用していた。その後は、保健室から溢れ出た生徒の“居場所”として、

対応の出来る範囲で開放している。昼休みは昼食や更衣、放課後は待ち合わせ等に、入れ替わりで、毎日10数名の利用がある。教室をロッカーで二分し、それぞれに花柄のクロスを掛けたテーブルを置いた。彼らは外から見えないようにレースのカーテンを閉め、隣のグループとの間に衝立を置く。自分たちの“居場所”を確保した後、昼食やお菓子を食べる。マンガを読んだり黒板に落書きをしたり歌ったり・・・友人と一緒にの場に居てもそれぞれに音楽を聞いたりゲームをしている。利用する生徒は、はしゃいだり賑やかな中にいるのが苦手なタイプが多く、自分のペースで自由な時間を過ごしている。

教室以外に“居場所”を求めても、保健室では受け入れきれないことがある。試行錯誤を繰り返しているが、学校にはこのような部屋があっても良いのではないだろうか？

(こんどう あきこ 中沢高校養護教諭)

“便所掃除”から見えてくること

那賀島芳郎

教室内での立ち歩き、友達同士での私語、トランプ遊び、教職員への悪態、遅刻、きままな教室の出入りなどを嘆く声がよく聞かれる。今、私語どころか授業の成り立たない学校さえ数多くあると言われている。何か変だぞ。

その生徒の嫌がる便所掃除をめぐる話——県内のある学校で、悪いことをした生徒に懲罰の為に便所掃除や庭の草むしりをさせ、その監督を技能員がやったという話があった。「何かおかしいじゃないか。便所掃除は汚い仕事だから罰として生徒にやらせるのか。仕事の上下や差別なりを認めることになるのではないか。また技能員がそれに加担するということは教育の否定につながるのではないか」ということで大変議論になった。また他県の例だが、詩人・濱口國雄（元国鉄労働者）の「便所掃除」という詩を生徒指導部が印刷し、大便器の前や目につく所のタイルにベタ貼りにしたところ、少なくとも壊すとか汚すとかの行為が減ったという話を聞いたことがある。その他、校長自らが

便所掃除を始め、好きでやっているのだと続けた。一ヶ月位すると便所が綺麗になってきた、という話もある。

捨てることが美德とされる、ポイ捨てるの日常に育った生徒たちと、「捨てるバチが当たる」と聞かされて育った青・壮・実年組とが、ひとつの施設の中で生活しているわけで、物の価値判断も感覚にも違いがあるのは当然かもしれない。しかし、潤いのある場にいれば心も和み、綺麗な所であれば、そこを汚すまいとする心の働きの生ずるのが自然である。壊されたら直ぐ修理する、壊れたままにしておくとか破損箇所が広がる。地味な努力や何かの工夫をすることが学校には必要である。

学校という教育の場では、人と人の関係そのものが環境であり、人と人がふれあうその場が生徒指導でもある。人間的なふれあいを通して、物の価値観や瑞々しい感性を培うことが、生徒の成長につながるだろう。

(なかじま よしろう 麻溝台高校技能員)



前号で特集したシンポジウムが11月16日行われました。約150名の参加者があり、「高校改革」への関心の高さが伺われました。当日の内容は、参加者の感想も含めて『ねざす』19号の特集で紹介する予定です。今の高校が子どもたちにとってどのような意味を持っているのかを問うていく時、このままで良いと言い切れる高校は少ないのではないのでしょうか。特別な条件にある学校のみが「改革」を必要としているのではないはず。その意味で今回、教文研の教育相談で相談員として子どもたちの声に耳を傾けておられる浅見聡先生に寄稿をお願いしました。ま

た養護教諭や技能員として、教室の外から生徒を見て実践しておられることや感じておられることをまとめていただきました。“相談”を必要としている高校生の急増、恐らく教室では“問題なし”と見られている生徒の悩みをどう受けとめれば良いのでしょうか。教育研究所では『教育白書97』の独自調査として学校生活になじめない、或いは違和感や反発を感じていると思われる生徒の意識や生活に迫れるような調査ができないか、現在検討中です。将来を見据えつつ、シンポジウムを出発点とした「改革」論議を、生徒や保護者と共に深めていきたいものです。